令和５年度文部科学省委託事業

彩の国
埼玉県

令和５年度「学校安全総合支援事業」

児童生徒の「安全に関する資質・能力」の育成を目指して

埼玉県マスコット「コバトン」

令和６年３月

埼 玉 県 教 育 委 員 会

挨　　拶

日頃、本県教育行政施策や諸事業の推進に当たり、格別の御理解、御協力をいただき心から感謝申し上げます。

さて、我が国は、激甚化・頻発化する自然災害のリスクや、登下校中の事件・事故、不審者による犯罪など、子供の安全を脅かす様々な危険が顕在化しております。

このような中、国は令和４年３月に「第３次学校安全の推進に関する計画」を策定し、学校安全に係る基本的な方向性と具体的な方策を示しました。学校は計画に基づき学校環境の整備や組織的な取組を一層充実させるとともに、安全教育を通じ、児童生徒等がいかなる状況下でも自らの命を守り抜き、安全で安心な生活や社会を実現するために自ら適切に判断し主体的に行動する態度を育成することが求められております。

本県は文部科学省「学校安全総合支援事業」を受託し、生活安全、交通安全、災害安全の３つの領域について、安全教育の推進に取り組んでまいりました。取組としては「①これまでに蓄積した防災をはじめとする先進的取組を踏まえながら、継続的で発展的な学校安全に係る取組を地域が一体となって推進すること」、「②学校安全の組織的取組、外部専門家の活用、学校間の連携をはじめ、地域の学校安全推進体制の構築を図ること」の２点としております。

上記の目標を達成するために、本年度は「モデル地域」を狭山市、深谷市、吉川市に委託し、それぞれの学校や地域の実情に応じて学校間や地域、関係機関との連携を図った学校安全の充実・発展に資する実践にお取り組みいただきました。実践に当たっては、学校安全アドバイザーとして、埼玉県立大学保健医療福祉学部　髙橋宏至教授をはじめ、慶應義塾大学環境情報学部　大木聖子准教授、埼玉県警察本部交通総務課、埼玉県警察本部生活安全総務課、熊谷地方気象台の皆様に御指導をいただき、モデル地域の３市はもとより県内各学校での安全教育の一層の推進につなげることができました。

一方、県立学校の生徒に対しては、防災教育として「高校生災害ボランティア育成講習会」を開催し、災害時における学校や地域に対する支援者としての自覚や、安全で安心な社会づくりに貢献する態度の育成に取り組みました。

交通安全教育では、県立進修館高等学校、県立三郷高等学校の２校を「交通安全教育推進校」に指定し、生徒や地域の交通状況の実態に応じた実践にお取り組みいただきました。

また、すべての高校を対象に、東西南北４地区の会場で「自転車安全運転推進講習会」を開催しました。本講習会を受講した各校の代表生徒が、自校生徒に対して講習内容を伝達することにより、各校の交通安全意識の向上を図り、自転車交通事故防止の一助となっております。

本事業の推進に当たりまして、学校安全アドバイザー及び県推進委員の皆様、そして、モデル地域の狭山市、深谷市、吉川市教育委員会及び拠点校、交通安全教育推進校、関係の皆様に改めて感謝申し上げますとともに、埼玉県の学校安全に関する取組がさらに充実・発展することを期待し挨拶といたします。

令和６年３月　　県教育局県立学校部参事兼保健体育課長　松中　直司

令和５年度「学校安全総合支援事業」埼玉県事業報告書

目　　次

１　事業概要・事業展開 …… １

２　事業報告

◆　狭山市の取組 …… ２
狭山市教育委員会
狭山市立入間川小学校　　狭山市立入間川中学校

◆　深谷市の取組 …… ５
深谷市教育委員会
深谷市立藤沢中学校　　深谷市立藤沢小学校

◆　吉川市の取組 …… ８
吉川市教育委員会
吉川市立中央中学校　　吉川市立関小学校　　吉川市立栄小学校

◆　高校生災害ボランティア育成講習会報告 …… １１

◆　高校生の交通安全教育推進校実施報告 …… １５

◆　高校生の自転車安全運転推進講習会報告 …… １７

３　講演資料

◆　桐田　寿子　様 …… １８
山下　誠二　様 …… ２２

４　情報提供

◆　避難訓練の実施方法【封筒訓練】　慶應義塾大学准教授　大木　聖子　様…… ３３

５　埼玉県推進委員会推進委員及び学校安全アドバイザー等一覧 …… ３８

令和５年度埼玉県学校安全総合支援事業（埼玉県概要）

○ 事業概要

児童生徒等を取り巻く多様な危険を的確に捉え、児童生徒等の発達段階や学校段階、地域特性に応じた取組を全ての学校種において推進する必要性がある。また、家庭・地域との連携・協働をはじめ、学校安全の推進に関し、地域間・学校間・教職員間に差があるとともに、継続性が確保されていない状況が見られるという指摘があり、全ての学校において、質の高い学校安全の取組を推進していくことが求められる。

①これまでに蓄積した防災をはじめとする先進的取組を踏まえながら、継続的で発展的な学校安全に係る取組を地域が一体となって推進する。

②学校安全の組織的取組、外部専門家の活用、学校間の連携をはじめ、地域の学校安全推進体制の構築を図る。

など、地域や学校の抱える学校安全上の課題に対して、積極的に取り組む地域や学校を支援する。

○ 事業内容

- ■ モデル地域・拠点校を中心とした学校安全推進体制の構築のための支援事業
  （授業や訓練の参観・アドバイザー派遣）
- ■ 災害ボランティア活動の推進・支援事業
- ■ 交通安全に関する自転車安全運転推進・支援事業

○ 埼玉県推進委員会の設置

- ■ 有識者、県消防協会、教育事務所、市町村教育委員会、気象台、県警本部職員、県危機管理担当者、県立学校長等で構成
- ■ 学校安全アドバイザーの派遣、取組支援（授業や訓練の参観・情報提供等）、効果の検証、成果発表会の実施等

拠点校を中心とした取組の充実（小・中学校で実施）

■ 県は実施を希望する市町村教育委員会に再委託をする。
モデル地域：狭山市、深谷市、吉川市

■ 市町村教育委員会はモデル地域と拠点校を設定する。実践委員会を設置する。
- ・学校安全体制を見直すサイクルを確立する。
- ・リスクを想定した危機管理マニュアルの作成・見直しを行う。
- ・指導時間の確保等、学校における教育手法の改善を図る。
- ・中核教員の校務分掌の明確な位置付け、研修・訓練の充実を図る。
- ・地域の災害リスクを踏まえた実践的な防災教育の充実と関係機関との連携強化を図る。
- ・学校と地域との連携・協働の仕組みを活用した学校安全の取組を行う。 等

学校安全アドバイザー派遣（県が委嘱）

■ 安全に関して専門的な知識を有した関係者等を学校安全アドバイザーとして県が委嘱し、拠点校を中心に派遣する。
- ・アドバイザーは、有識者、熊谷地方気象台職員、県警本部職員とする。

■ 学校安全アドバイザーの業務
- ・危機管理マニュアルや避難訓練等に対して指導・助言にあたる。
- ・学校と地域の関係機関等との連携体制の構築を図る。

災害ボランティア育成事業（県立学校を対象に実施）

■ 支援者としての自覚や、安全で安心な 社会づくりに貢献する態度を育成する。

■ 災害時において共助のために率先して行動する生徒を育成する。
- ・15校程度の生徒及び教員を対象に実施。
- ・ボランティア活動について、避難所設営、救護活動訓練等を実施する。
- ・県防災学習センターを利用する。

交通安全教育事業（県立学校を対象に実施）

■「高校生の交通安全教育推進校による取組」

■ 自転車安全運転推進講習会の実施
- ・スケアード・ストレイト教育技法による自転車交通安全教育を実施する。
- ・高校生の交通安全教育講座を実施する。
- ・4地区での自転車安全運転推進講習会を実施する。

期待される成果

- ・ 児童生徒等の安全に関する資質・能力を育むための系統的・継続的な学校安全推進体制の構築と普及促進
- ・ 学校安全アドバイザー等の専門的知見を活用した学校安全に係る取組の質的向上
- ・ 支援者としての自覚を促し、安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育手法の開発と普及促進
- ・ 教職員等の安全教育、安全管理に関する知識の習得や実践力の向上

事　業　展　開

○ 学校安全に関する事業展開

【第3期　埼玉県教育振興基本計画】　基本理念：豊かな学びで未来を拓く埼玉教育
基本目標Ⅵ「質の高い学校教育のための環境の充実」～子供たちの安心・安全の確保～

モデル地域
- ○ 学校安全推進体制の構築
- ○ 3市教育委員会で実施
- ○ モデル地域内の小・中学校を拠点校に指定

推進委員会
- ○ 大学関係者、消防関係者、教育事務所、市教委担当者、気象台、県警、県危機管理担当者 、県立高校長で構成
- ○ 学校安全アドバイザーを委嘱、拠点校やモデル地域に派遣
- ○ 間接的なボランティア活動の取組の推進と開発
- ○ モデル地域の成果の取りまとめ
- ○ 各事業の効果検証及び成果発表会の実施

災害ボランティア育成講習会
- ○ ボランティア活動についての講義・演習、防災に関する実習等の実施により、災害時において率先して「共助」のために行動する生徒の育成
- ○ 埼玉県防災学習センターにおいて、県立学校の生徒を対象に実施

令和５年７月・推進委員会（県設置）の開催

県立学校
- ■ 交通安全に関する資質・能力の育成
  - ・「自転車安全運転推進講習会」の実施と各校での伝達
- ■ 安全で安心な社会づくりに貢献する資質・能力の育成
  - ・支援校を中心とした「救急救命に関する講習会」の実施
- ■ 「共助」のために率先して行動する資質・能力の育成
  - ・「災害ボランティア育成講習会」の実施と各校での伝達

モデル地域の市・拠点校

実践委員会（市設置）の開催 → 学校安全アドバイザーからの事前指導 → 系統性・継続性を意識した学校安全計画や指導計画の作成 / 危機管理マニュアルの改善 / PTA、地域との連携体制づくり / 教職員を対象とした研修会や安全教育授業研究会 / 学校安全計画や危機管理マニュアルに基づいた合同避難訓練や交通安全教室等の実施 → 学校安全アドバイザーからの指導 → 実践委員会での効果検証 ※地域の学校安全推進体制の構築 ※モデル地域への共有・普及

実践委員会
- ● 市町教育委員会、拠点校、PTA、消防関係者、学校安全アドバイザー等で構成
- ● 取組内容についての検討
- ● 関係機関との調整
- ● モデル地域の学校安全計画や危機管理マニュアルの見直し・改善
- ● 中核教員の資質向上についての協議

学校安全アドバイザー
- ● 専門的な知識を有した専門家（大学教授、県警察本部職員、気象台職員等）
- ● 学校安全計画、危機管理マニュアル、避難訓練等、「安全教育」「安全管理」「組織活動」に対する指導・助言
- ● 学校安全（生活安全・交通安全・災害安全）に対する指導・助言

令和６年１月・推進委員会による各種取組の効果検証

令和６年１月・成果発表会の実施（全県への普及）

事業報告書の作成・配布

児童生徒の「安全に関する資質・能力」の育成

令和５年度　学校安全総合支援事業報告

狭山市の取組

狭 山 市 教 育 委 員 会
狭山市立入間川小学校
狭山市立入間川中学校

１　狭山市の概要

狭山市は、埼玉県の南西部に位置し、都心からのアクセスも良く、人口約 15 万人の近郊都市である。市の中心を一級河川である入間川が流れ、広大な総合公園である「智光山公園」をはじめ、桜の名所としても知られる「狭山稲荷山公園」、「狭山茶」で知られる茶畑、入間川沿いの田園地帯、里芋の名産地としても知られる農地など、自然豊かな緑の多い生活環境がある。

また、関東三大七夕まつりとなっている「狭山入間川七夕まつり」では市内の全小中学校の児童生徒が短冊を飾る等にぎわいを見せ、市のイメージキャラクターも「七夕の妖精おりぴぃ」である。

その他にも、市内の西には「航空自衛隊入間基地」、北には「工業団地」があり、様々な魅力をアピールできる市でもある。

本市は、市立幼稚園２園、市立小学校１５校、市立中学校８校であり、各校の立地状況も様々である。それぞれに特徴があり、安全教育への意識はとても高い。一方で、市として統一的な取組が少なく、本市の課題となっていた中で、本事業の機会を得た。

２　狭山市の取組について

（１）目的

児童生徒と教職員の防災・防犯意識の向上と主体的な行動を目指した安全教育の推進

（２）組織

埼玉県学校安全アドバイザー、狭山市教育委員会、安全教育研究委員会、市危機管理課、モデル校、

（３）実践・取組

ア　安全教育研究委員会の設置

これまで本市は、安全教育の必要性は各校が強く感じておりそれぞれの取組はあるものの、市として統一した取組やスタンダードといった考え方が希薄であった。本事業の機会を得たことで、本年度より市教育委員会委嘱の研究委員会を設置した。

構成メンバーには、安全主任ばかりではなく、校長・教頭・教務主任・養護教諭・体育主任等、様々な立場で学校の中心となる教職員を選出した。

本事業のモデル校での研修会や避難訓練等にも参加して、各校へ広めていけるように意識をしながら研究を進めている。

イ　モデル校での安全教育研修会（４月２４日　対象：モデル校教職員）

学校安全アドバイザーである西部教育事務所 墨谷指導主事を指導者に迎え、「学校安全の推進について」と題した基調講演を実施した。今年度の取組に対して、また学校安全全般について具体的に意識できていなかった教職員が、必要性を感じ今回の取組への意欲をもつきっかけとなった。今後、学校安全のどの部分にスポットを当てて取り組んで行けばよいのかが具体化された。

ウ　教員実動訓練（６月１９日　対象：モデル校教職員、参加：市内教職員、安全教育研究委員、市危機管理課職員）

慶応義塾大学環境情報学部 大木准教授を指導者に迎え、研究室の学生が児童役を演じる設定の下、モデル校教職員が実際に被災した際の対応を体験した。被災した環境下では教職員はどのような精神状況の中で対応を迫られるのか、またどんな行動を取ればよいのか、児童役の学生が迫真の演技を行うことで緊張感のある訓練となった。

エ　実践委員会（８月２９日　対象：学校安全総合支援事業実践委員会委員、モデル地域における学校安全を推進するための中核教員、安全教育研究委員）

本年度の学校安全総合支援事業実践委員会に安全教育研究委員も加わり、共催の形で、本年度の取組の確認後に「新しい形の避難訓練」について、本市実践委員会委員であり学校安全アドバイザーでもある西部教育事務所墨谷指導主事から講義をいただいた。

オ　授業研究会（１０月４日　対象：３年生児童、モデル校教職員、参加：安全教育研究委員、市内教職員、市危機管理課職員）

慶応義塾大学大木研究室から示されている「写真で危険さがし授業」を参考に授業研究会を実施。慶応義塾大学環境情報学部 大木准教授を指導者に迎え、実際に起こりうる状況を予測し、状況に合わせて自ら判断し自分の命を守ることができる児童の育成を目指した。

カ　新しい形の避難訓練を体験（１０月４日　対象：モデル校教職員、参加：安全教育研究委員、市内教職員、市危機管理課職員）

授業研究会後に、６月に行った「実動訓練」の振り返りをし、さらに実際を想定した２回目の訓練を実施した。様々な状況が書かれた紙が封筒に入っていて、その場で担任が内容を見て判断し行動するものであった。優先順位や求められる行動、必要な物品等を考える機会となった。

キ　新しい形の避難訓練の実施（１２月２０日　対象：モデル校児童モデル校教職員）

「実動訓練」や「状況を設定した訓練」等の経験を基に、様々な児童の状況を設定しその場で担任が内容を見て判断し対応した。児童が学校内に止まる新しい形の避難訓練を実施。これまでの訓練で課題となっていたケガ人の搬送や情報の集約等、購入した物品を有効に活用しながら実践できた。

３　成果と課題について

（１）成果

・　教職員の意識が大きく変化した。モデル校の教職員だけではなく、訓練や研修に参加した教職員の意識が大きく変わり、実感として安全教育の必要性を感じる機会となっていた。

「安全教育に取り組むことで教職員も同じ方向を向くことができ、団結力も高まり、学校の力となる。」といった指導者の言葉をモデル校の教職員からも感じることができた。

・　実際に研修に参加したことで、「新しい形の避難訓練」を実施した学校もあった。市の安全教育研究委員会を中心に、今後、全市的に「新しい形の避難訓練」等を広げていく予定になっている。

・　モデル校でも課題の１つとなっていた「不審者対応」について、安全教育研究委員会とも協力しながら『危機管理マニュアル』の見直しを市内統一で行うことができた。不審者侵入防止の３段階チェックの視点を踏まえたフォーマットを作成できた。

（２）課題

・　小中での連携。本事業でもモデル地域として小中の連携を視野に入れ、合同での引き渡し訓練等も提案されたが、今年度は実現することができなかった。今後、より具体的な災害等を想定して、児童生徒、家庭の動きを考慮した訓練を実施していきたい。

・　保護者への通知・配布・情報提供については、市内で統一した「災害時のきまり」等の配布物を作成したり、学校での安全教育の取組を理解してもらったりする機会を積極的に作っていく必要がある。学校への信頼感に繋がるような取組が必要である。

・　市内統一の危機管理フローチャート等の作成については、学校ごとに作成されているが、市内である程度統一された内容になっていれば教職員の異動等にも対応できる。

・　実際を想定した不審者対応訓練の実施については、警察署と連携した不審者対応訓練を実施している学校もあるが、現在は一部の学校のみの実施となっている。『危機管理マニュアル』の見直しと共に、より現実的な事態を想定した訓練の実施が不可欠である。

令和５年度　学校安全総合支援事業報告

深谷市の取組

深谷市教育委員会
深谷市立藤沢中学校
深谷市立藤沢小学校

１　深谷市の概要

深谷市は、埼玉県北部に位置し、豊かな自然を生かした県内有数の農業地域であり近年「新一万円札の肖像となる渋沢栄一翁の生誕地」として注目を集めている。

市立幼稚園７園、市立学校数は小学校 19 校、中学校 10 校であり、市立各園・学校では、地域に根ざした特色ある教育活動が行われている。

２　深谷市の取組について

（１）藤沢中学校区の安全指導に係る特徴

小学校１校（20 学級）、中学校１校（11 学級）で、小中の“学びの接続”が円滑であり、9 年間を見通した意図的、計画的な教育活動を行うことができる“強み”がある。藤沢中学校区は通学区域が広く、藤沢小学校の徒歩での通学距離は市内の他の小学校と比べて長い。また藤沢中学校は、生徒全員が自転車通学の対象であるため、小中学校ともに児童生徒の安全意識向上に係る安全指導は重要な教育活動である。

（２）目的　自ら命を守ろうと主体的に行動する態度の育成

（３）組織　教育委員会、市関係各課、関係諸機関、市内小中学校、深谷警察署等

３　実践・取組

小中学校の連携を生かした安全教育の推進

ア　小中合同交通安全教室

小学校６年生から中学校３年生を対象に、県の事業であるスタントマンによるリアルな交通事故再現を取り入れた自転車交通安全教室（スケアード・ストレイト）を実施した。全員が自転車通学となる藤沢中学校区の交通安全上の課題は、安全な自転車の乗り方であるが、児童生徒の振り返りの記述からは、安全意識の高揚が認められた。

小中合同交通安全教室
（リアルな交通事故の再現）

【児童生徒の感想】
- ヘルメットをかぶる大切さやもしも事故にあってしまったときの行動の仕方などを学ぶことができた。自転車は被害者にも加害者にもなると知ったので、交通ルールを守り生活したい。（小学生）
- あらためて、交通安全を意識して自転車に乗ろうと思いました。スタントマンの方々が実際の事故の状況を再現してくださり、事故の衝撃が伝わってきました。（中学生）

イ　危機管理マニュアル見直し

大きな災害や事件事故が起きた際に、学校は、児童生徒の安全・安心を確保した上で、保護者への引き渡しとなる。藤沢中学校区の小中学校連携の“強み”を生かし、速やかに保護者への引き渡しができるよう、小中学校で共通の確認内容を載せた“引き渡し確認カード”を作成して、活用している。これは「危機管理マニュアル」の見直しの一貫で行われたものである。

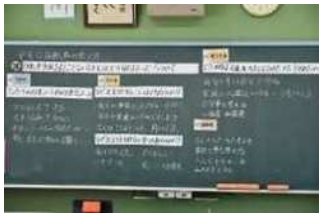
ウ　小中学校合同研修会の実施

小中合同研修会

職員研修として小中学校合同研修会を計画的に行っている。今年度の全体会では、「令和５年度学校安全総合支援事業」のモデル校として、安全意識の高揚を目指した取組を行っていく旨を小中学校の全職員で共通理解するとともに、分科会では生徒指導部会や特活部会において、藤沢中学校区における、安全指導の取組の方向性を議論した。その中で、生徒会と児童会の具体的な連携方法や横断幕の作成について話し合い、今年度の取組につなげることができた。

エ　小中学校合同授業研究会の実施

「安全な自転車の乗り方（ウ　心身ともに健康で安全な生活態度の形成）」を題材にして授業研究会を行った。藤沢小学校４年生の実態「交通安全教室で自転車免許証をもらい、安全のためのきまりは理解しているが、実際には実行できていないこともある」をふまえ、“自分たちも事故に遭遇しかねない”という認識と、“きまりを守っていても交通事故に遭遇してしまう”恐れについて深く考えさせることを目指した授業を実践した。中学校の教員も参観し、協議することで、中学校区での連続性をもった学びについて共通理解することができた。



小中合同授業研究会

オ　小中学校で同じ課題意識をもった避難訓練・防犯訓練

避難訓練

小学校、中学校ともに、これまで、火災と地震に係る避難訓練を行ってきた。今般の状況を踏まえ、不審者の侵入を想定した避難訓練を小中学校の実施時期を調整しながら行うこととした。小学校実施の訓練を中学校の職員が参観することで、発達段階に応じた指導の在り方について認識を深めることができた。

カ　児童会・生徒会活動の連携、充実

児童会・生徒会
小中合同あいさつ運動

児童会と生徒会の交流、連携についての取組が従前から充実しており、小中学校の滑らかな接続の観点から、主に生活面に効果をあげてきた。その“強み”を生かしての交通安全意識の高揚を目指し、小中学校合同あいさつ運動の充実、共通の“めあて”を掲げた横断幕の作成を行った。横断幕のメッセージは、藤沢地区の交通安全上の課題を児童生徒が見つめ直し、作成したもので、児童生徒の発意発想を生かすことができた。

キ　地域と協力した見守り活動

小中合同学校運営協議会

福祉車両を「110 番の車」登録

藤沢中学校区では、小中合同で学校運営協議会が行われてきている。今年度は「小中学生が登校時すれ違うのだが、自転車の中学生が車道に出て危ない」など、交通ルールの徹底、自転車の安全な乗り方、交通マナーについて、意見が交わされた。学校運営協議会の議論の内容や結果は、職員や地域の方々に伝えられ、子供たちへの直接の支援や、見守り活動の充実につながっている。

また、今年度は、学校教育課として、深谷市社会福祉協議会と連携し、社会福祉法人福祉施設等情報交換会の場で「こども１１０番の車」について紹介したところ、福祉施設所有の福祉車両を「こども１１０番の車」として登録いただくこととなった。この結果、福祉施設が多くある藤沢中学校区においては、地域での見守りの目が増えた。

ク　防犯カメラの設置

不審者に対応し、犯罪を抑止するため、また、児童の安全・安心を図るために、「三段階のチェック体制」を働かせることを念頭に置いて、学校で最適な設置場所を検討し、門や玄関等を映す防犯カメラを設置した。

映像を常に職員室で見ることができるため、不審者等が現れた場合は、すぐに対応することができるようになっている。三段階チェック体制を機能させる上で、課題となっていた校門から玄関までの様子を確認できるようになっている。

４　成果と課題について

（１）成果

- 小中連携の視点で、各小学校、中学校の安全指導に係る方針や重点、具体的な手立てを検討・実施することで９年間を見通した意図的、計画的な指導を効果的に行うことができた。
- 学校内の取組にとどまらず、関係諸機関と連携することで、豊かな教育活動及び、地域の見守り活動の充実を図ることができた。
- 児童会と生徒会の連携の諸活動に象徴されるように、児童生徒の主体的、自治的な活動を通して、モデル地区における安全への意識が高まった。

（２）課題

- 深谷市教育研究会等との連携を通して本事業の研究成果を市内各校に広める。
- カリキュラムマネジメントの考えから、関連する教育活動をつなぎ合わせたり、今までの取り組みに、ゲストティーチャーを招いたりして、一つ一つの学習の質を一層高めていく。

吉川市イメージキャラクター
なまりん

令和５年度　学校安全総合支援事業報告

吉川市の取組

吉川市教育委員会
吉川市立中央中学校
吉川市立関小学校
吉川市立栄小学校

１　吉川市の概要

本市は、中川と江戸川の大きな二本の川に挟まれた市で、日頃より水害を意識した防災、減災に取り組んでいる。令和５年６月２日の大雨でも、避難所を５か所開設し、多くの方が避難をされた。

本市には、小学校８校、中学校４校の計１２校があり、中学校１校と小学校２校で構成された中学校区が４つある。今回のモデル校は、公共施設や市役所が学区内にあり、地域との連携を強化するに適した中学校区である。ここで実践的な防災教育や地域との連携ができれば、市内の他の中学校区にも広げることができると考えている。

２　吉川市の取組について

（１）目的

地域の災害リスクを踏まえた実践的な減災教育に取り組み、地域と連携を密にし、協働できる学校安全推進体制を構築する。

（２）組織

吉川市教育委員会指導主事、元吉川市危機管理課（現教育委員会副主幹）、元県消防防災課主事（現教育委員会主任）、モデル校校長及び安全主任

（３）実践・取組

ア　小学校における減災教育の実践

「子どもたちが普段、何気なく遊んでいる場所や通学路に潜む危険箇所などを考え、災害時における危険を認識し、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに、「自助や共助」について学ぶ。」ことを目的として行った。

内容は、災害図上訓練（DIG「ディグ」）により、グループで学区内にある施設や災害時の危険個所を考える。また、講義の際、危険の回避方法や身の守り方をおりまぜながら授業を進めた。

他課との連携を図り、吉川市危機管理課職員が講義を行った。

イ　中学校における減災教育の実践

「災害から自らの命を守るために、一人一人が災害に対する意識を高めるとともに、災害時に自主防災組織等と連携を図り、即戦力となるスキルや知識等を学び、災害対応力を向上させる」ことを目的として行った。

内容は、避難所における資機材の組み立て、消火活動等に必要な技術の習

得を図るため、以下の訓練を行った。

（あ）　ワンタッチパーテーション、簡易ベッド組み立て訓練

避難時にパーテーションの設営、簡易ベットの組み立てを地域の組織と協力して行えるようにする。

（あ）

（あ）

（い）　災害用簡易トイレ（テント含む）組み立て訓練

災害時、トイレが使えなくなることを想定し、段ボールを使ったトイレの組み立てができるようにする。

（う）　発動発電機起動訓練、ＬＥＤバルーン投光器組み立て訓練

災害時、停電が起こった時を想定し、発動発電機の仕組みを理解し、起動ができるようにする。

（え）　消火訓練

消火器の使い方を理解し、実際に火災が起こったときに行動に移せるようにする。

（い）

（う）

（え）

ウ　吉川市減災プロジェクトへの参加

本プロジェクトは吉川市が主催し、水害時における住民との協力体制の確立に重点を置いた実践的な訓練を実施し、「自助・共助」をテーマとして、減災意識、水害時避難行動の理解促進及び地域コミュニティによる減災力の向上を図ることを目的に開催された。

今年度は、ここに、モデル校である中央中学校の生徒会の生徒が参加し、地域の方々と協働しながら避難所開設や片付けを行った。また、生徒は避難の仕組みを知る事ができ、災害やその際の避難を自分事として捉えることができた。

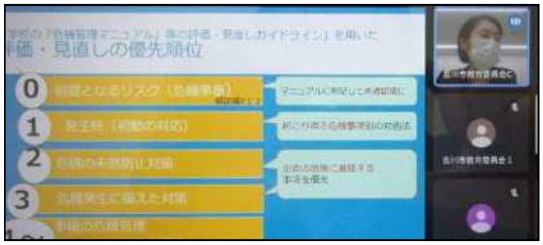
エ　安全主任を対象とした防災研修会の開催

「災害から自らの命を守るために、一人ひとりが必要な知識を身に付け、正しい備えをすることで、減災対応能力の向上を図るとともに、減災の担い手である児童生徒に対して、減災教育を指導できるようにすること」を目的として行った。

内容は、地震・風雨水害に関する基礎知識や災害への備え、心構えについて、地図を囲んでの災害図上訓練を教員同士が話し合いながら行った。また、災害対策研究会の方の講義を受けることで、避難の際の注意点や二次災害の危険性等、共通理解を図ることができた。教員も災害やその対応を自分事として捉えるよい機会となった。

オ 教頭を対象とした危機管理マニュアルの作成研修会の開催

危機管理マニュアルは、地域や学校の構造、児童生徒の数によって避難方法等が変わってくるため、各校が毎年改定している。今回の研修では、近年増加している大雨に対する対応、共通で理解が必要な事項を中心にオンラインで研修を行った。



カ 県学校安全アドバイザーによる教頭会を対象とした研修会の開催

学校安全アドバイザーの熊谷地方気象台入福敏行気象情報官にご講義をいただいた。

今年６月の大雨の際、市内では避難所を５か所開設し、その内４か所が小中学校であった。その他にも、急な大雨により登校や下校を止めたり、再開したりすることに苦慮することが多々あった。今回の研修では、キキクルの活用方法や実際に空を見て確認をする方法等、様々な視点から天気について講義をいただいた。

３　成果と課題について

（１）　成果

災害やその対策について、本事業の取組により、教職員をはじめ児童生徒が自分事と捉えられるようになり、自分の立場で何ができるかを考えることができた。また、地域との協働を生徒が自ら体験することで、「自助・共助」の意識が高まった。

また、年々、激しい雨や大雨に見舞われる回数が増えている中で、児童生徒が学校にいるときの判断等に役立つ情報を学校安全アドバイザーに講義いただいたことで、最新の情報を得ることができたとともに、市内管理職に共通理解を図ることができた。

（２）　課題

本事業を、モデル校だけにとどめることなく、市内に情報を発信し、広めることで、安全教育のさらなる充実をはかることが必要である。

また、今回は、家庭との連携が実践されなかったため、学校と家庭で共通理解、共通行動がとれるよう今後は家庭との連携を強めていく必要がある。

高校生災害ボランティア育成講習会報告

【開催日】令和５年８月４日
【会場】埼玉県防災学習センター
参加生徒代表　本庄高等学校
代　菜央　　飯島　心結

この資料は、高校生災害ボランティア育成講習会に参加した「県立本庄高等学校」の生徒２名が、参加報告の際に使用したデータを編集したものです。

～報告内容～

- 防災学習センター施設体験講習について
- 避難所運営学習「HUG] について
- 避難所開設訓練について
- 自衛隊のライフハックについて
- 講習を通しての感想

施設体験講習について～地震体験～

防災センターの施設体験では地震、煙、強風、消化器の４つを体験しました。
その中でも地震と強風体験を紹介します。地震体験では機械を使って震度７の揺れを体験しました。
初めは耐えられると思っていたけれど、つかまっていないと倒れてしまいそうになりました。
また、この揺れにより棚などの家具が倒れてきて、下敷きになってしまう可能性を考えると、普段から家具の固定をしておいた方が身のためであると実感しました。

～強風体験～

強風体験では機械を使い、30m/s の風を体験しました。
前を向いていると息ができず、普通に歩くこともままならないような強い風でした。
外では大きいものが前からとんでくると考えると恐ろしいと思います。
台風の時など風が強い日にはむやみに外にでるのは危険だと思いました。
また、とんできたものでガラスなどが割れないようにするのも大切だと思いました。

避難所運営学習「HUG」について

避難所運営ゲーム「HUG」を行いました。避難者の年齢、性別、国籍等それぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるかなどを模擬体験するゲームです。カードをめくると、小さい子供と一緒に逃げてきた家族や、障害のある人等が記載されており、適切に配置するために迅速な対応が必要でした。私たちのグループは、コミュニケーションが取れるような配置を心がけ、同じ事情の人たちが近くに集まれるようまとめていきました。避難所で快適に過ごすためには、避難者の気持ちになって考えることがとても重要なのだと思いました。

避難所開設訓練について

簡単！

避難開設訓練では、ダンボールベットを作りました。ネジなどの工具は一切使わず、ダンボールを組み立てるだけで簡単に作れてとても便利だと思いました。また、100kg 程度の重さに耐えられ、人が横になっても問題ないです。横たわった感覚はとても快適でした。
このダンボールベットがもっと普及すれば、避難所でとても快適に過ごすことができるのではないかと思いました。

自衛隊のライフハックについて

次に自衛隊の皆さんに教えていただいた、ライフハックについてです。ライフハックとは効率よく仕事を行い、生産性を上げ、人生の質をあげるための工夫や知恵のことです。
その中でも実際に教えていただいた２つの例を紹介します。１つ目はブルーシートを寝袋にする方法です。
まず、ブルーシートの上に新聞紙を広げ、新聞紙をテープで軽くとめます。次にブルーシートを中央にたたみ、最後に端を縛ってテープで巻きつければ完成です。
2 つ目は懐中電灯をランタン代わりにする方法です。懐中電灯にビニール袋を付けるだけでできる、とても簡単なものです。
ビニール袋はくしゃくしゃにすることでより光が反射し、明るくなります。ビニール袋の他にペットボトルを使ってランタン代わりにすることもできます。
このような避難時などに役に立つ情報を教えて頂きました。

講習を終えての感想

- 災害への備えが大切。
- 災害について知ることの大切さ
- 命を守るためには自助をした上で成り立つもの

この講習会を通して、災害について知ることが大切だと思いました。
普段、関わらない避難所の開設や強風・地震体験は１度体験しないとわからないものなので、その場面になった時に少しでも役立てるようにしたいと思いました。
また、日々の備えの「自助」をすることで、被害を小さくできることがわかりました。今回学んだことを他の人にも伝えたいと思いました。

高校生の交通安全教育推進校実施報告書

学校名	埼玉県立進修館高等学校
生徒数及び職員数	生徒数　８２９ 人（男子５０７人　女子３２２人） 職員数　１１１ 人
取組の概要	1　交通安全にかかわる学校の概要 本校の正門横の道路は道幅が狭く交通量が比較的多く横断するのに注意を要する。毎朝職員が、交通安全指導・整容指導・挨拶指導の３つの目的で登校指導を行っている。生徒の４％が徒歩による通学、４８％が自転車による通学をしているため、交通安全教育は行田警察署の協力を得て行っている。今年度の交通事故件数は７件である。 2　交通安全に関する取組・実践 （1）本校で実施している取組 ア　校門での登校指導（毎朝８時～８時３５分） イ　自転車点検（５月） ウ　PTA との合同交通安全指導（６月に４日間、１０月に３日間） エ　通学路・東行田駅周辺の巡回指導（定期考査期間中） オ　行田警察との連携巡回指導（７月、８月、１２月、３月） （2）交通安全教育推進校としての取組 ア　埼玉県高校１年生自転車安全運転講習会 実施日：５月２日（火） 内　容：県教委から配布された資料と動画をもとに自転車の正しい乗り方について伝達講習を行った。 イ　行田警察署交通安全講話 実施日：７月１８日（火） 内　容：交通安全講話を聴き、交通安全の意識を高めた。 ウ　スケアード・ストレイト教育技法による自転車交通安全教育 実施日：７月１８日（火） 内　容：スタント業者による模擬交通事故の実演を通して、交通事故の衝撃、恐ろしさを視覚的に理解した。 エ　高校生の自転車安全運転推進講習会参加者による伝達講習会 実施日：１２月２０日（水） 内　容：資料を配布し、自転車安全運転推進講習会参加者による報告を行った。 3　成果と課題 交通安全推進校としての取組を通じて、交通安全意識を高め、交通ルールを遵守することの大切さを改めて学ぶことができた。また。交通事故の加害者にもなり得ることや、加害者になった際の責任の重さを知るよい機会となった。今後も上記の取組を継続し、保護者や地域、警察と連携しながら指導し続けたいと考える。

高校生の交通安全教育推進校実施報告書

学校名	埼玉県立三郷高等学校
生徒数及び職員数	生徒数　４６２　人 職員数　　５０　人
取組の概要	1　交通安全にかかわる学校の概要 本校は、重点目標の１つに「家庭・地域と連携した安心安全な教育環境の提供」を掲げている。また、学校の生徒指導方針として、校則や校内ルールを「守らせる」こと以上に「考えさせ自律を促す」ことに注力しており、様々な指導場面で「思考→判断→行動→内省」などの過程を大切にした指導を実践している。 昨年度（Ｒ４年度）、生徒の交通事故件数は１５件（うち救急搬送３件）であった。また、自転車の運転マナーに関して地域住民からの問い合わせや苦情も一定数あることから、教職員による通学指導や校外巡回指導等も定期的に実施しているが、思うような成果は得られていない。 学校外における生徒の行動にまで指導が及んでいない現状を考えると自他の安全に関する「意思決定・行動選択」の力をいかに育むか、生徒の安全行動をいかに促すか、その内容や方法の検討が喫緊の課題である。 2　交通安全に関する取組・実践 （１）校内の機運醸成（教職員に対する働きかけ） ア　関係機関の事業指定 ・学校安全総合支援事業指定校 ・県警察自転車ヘルメット着用モデル校 ・吉川警察署自転車マナーアップ推進校 イ　関係機関との事業連携 ・スケアード・ストレイト技法による交通安全教室の実施 ・ヘルメット着用モデル校委嘱式の実施 ウ　課題の共有と目標設定 ・交通事故件数の減少 ・自転車運転マナーの向上 ・自転車ヘルメット着用率の向上 （２）生徒の自律を促す手立て（生徒に対する働きかけ） ア　生徒が生徒に働きかける ・交通安全呼びかけアナウンス（年１回・放送部） ・自転車ヘルメット着用呼びかけ（年３回・生活委員） ・１日警察署長（年１回・生徒会長） ・自転車安全運転伝達講習会（年１回・生活委員） イ　家庭・地域の力で生徒に働きかける ・吉川警察署、三郷市役所との協働による交通安全指導（年３回） ・ＰＴＡによる通学指導（年３回） 3　成果と課題 学校安全総合支援事業の支援によって教職員が具体策を積極的に企画、運営するなど、校内に交通安全に関する機運が醸成された。また、吉川警察署や三郷市役所との連携を通じて、あらためて開かれた学校づくりの重要性を学校全体で感じることができた。一方、ヘルメット着用率が向上しなかったこと、生徒の不注意が要因と思われる交通事故が本年も発生したことなどについては、引き続き取組や手立てを工夫するなどして生徒の安全行動を促していきたい。

高校生の自転車安全運転推進講習会（県内４地区）

■事業の目的

高校生の自転車交通事故防止を推進するため、推進講習を受講した高校生が中心となり、自校生徒に対して自転車安全運転推進に関する取組を実施することにより、高校生の交通安全意識の向上を図る。

※　令和２年度から４年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、規模を縮小（各校代表生徒１名）して実施していたが、令和５年度は本来の規模（各校代表生徒２名まで）に戻して実施した。

■各地区開催日、会場、参加者

開催日	地区	会場	参加者
令和５年７月２４日（月）	西部	セイコーモータースクール	生徒６６名　教員４０名
令和５年７月３１日（月）	東部	東武こしがや自動車教習所	生徒６１名　教員３７名
令和５年８月２２日（火）	南部	ファインモータースクール	生徒６２名　教員３７名
令和５年８月２８日（月）	北部	上武自動車教習所	生徒３７名　教員２２名

※参加者数合計　生徒２２６名　教職員１３６名　計３６２名

■講習内容

○スケアード・ストレイト教育技法による自転車安全教育

〈スタントマンによる交通事故再現の見学〉

〈電動キックボードの試乗体験〉

○埼玉県警察本部交通総務課による講義
　・埼玉県の高校生の自転車交通事故の現状について
　・自転車乗用車ヘルメットの着用について
○防犯・交通安全課による講義
　・自転車安全利用新五則について
○東京海上日動火災保険株式会社（県の包括的連携企業）
　・加害事故責任と賠償保険について
○教育局保健体育課による資料・情報提供
　・自転車の安全点検のポイントについて
　・自校における伝達講習実施の方法について

〈講義の様子〉

子どもたちの命を守るために

～ＡＳＵＫＡモデルへの想い～

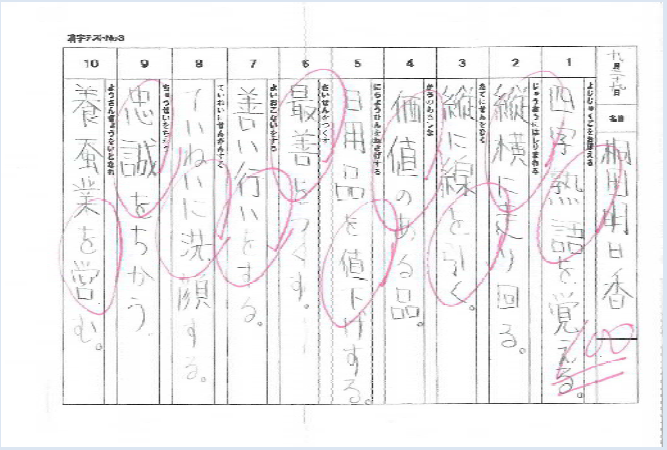
NPO法人いばらき救命教育・AEDプロジェクト理事
NPO法人ちば救命・AED普及研究会理事
NPO法人つなぐいのちの輪バイタルネットジャパン
さいたまPUSH　顧問
桐田寿子

明日香の紹介

- 年齢　１１歳
- 身長　１６４・５ｃｍ
- 体重　４９ｋｇ
- 運動会の徒競走で６年間１位
  ５年間校内マラソン大会で上位

・好きな言葉は「ありがとう」
・大切なものは「家族と友達」
・幸せなことは「私が生まれたこと」

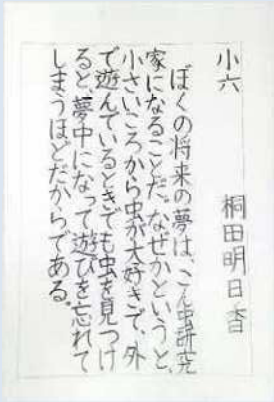
平成23年9月29日午前、国語の授業で漢字のテストを受けました。
いつもと、何ひとつ変わらない時間を過ごしていました。



想い出の品々

硬筆展作品

付箋いっぱいの漢字辞典と6年生の目標



平成23年9月29日給食はビオトープ近くにある外のテラスで食べました。
この感想文を書いた数時間後に明日香は倒れました。

事故の概要

平成２３年９月２９日　１６：０４頃

・駅伝大会の課外練習中、１０００m走の後に倒れる。

現場で指導していた教員等は「脈がある」「呼吸がある」と判断し、心肺蘇生及びAED装着は行っていない。
※けいれんが認められたが伝わっていない。

平成２３年９月２９日　１６：１５

・到着した救急隊が心肺停止であることを確認し心肺蘇生を開始する。

平成２３年９月２９日　１６：３７

・救急隊から医師に引き継ぐ。

平成２３年９月３０日　２１：４８

・死亡を確認する。

事故対応の問題点

心停止に対する認識不足
・死戦期呼吸についての知識がなかった。
・けいれんが、生命の危険を意味する重要な情報であるという認識がなかった。
・一瞬、目を開けたように見え、意識があると思った。
・苦しそうであったが、呼吸をしているように見えたため「呼吸あり」と判断した。
・意識がない　→　心停止の状態だという認識がなかった。

ＡＥＤに対する認識不足
・ＡＥＤが「心電図を自動解析する機能」を持っていることを認識していなかった。

集団心理？間違った判断を修正できなかった
・倒れた人を継続して、観察する人がいなかった。
・救急車が到着するまでの１１分間、ただ様子を見守るのみであった。
　→　重篤な状況だと、認識出ていなかった。

・心停止であったことを、教員が最後まで分からなかった。
・脈あり、呼吸ありとの情報から安心してしまった。

事故分析

分析手法　ＩｍＳＡＦＥＲ（アイムセイファー）

医療の現場で発生した事故を効果的に分析するための、
事象分析手法（ＲＣＡ）の一つ。
元自治医科大学メディカルシュミレーションセンター長
河野　龍太郎教授によって開発される。

・現場で実際に働いている人が使える。
・人間の行動モデルをベースにしている。
・分析手法がわかりやすく手順化されているため、
　初心者でもアドバイザー指導のもと取り組むことが出来る。
・各手順において、それぞれ便利なツールが提供されている。

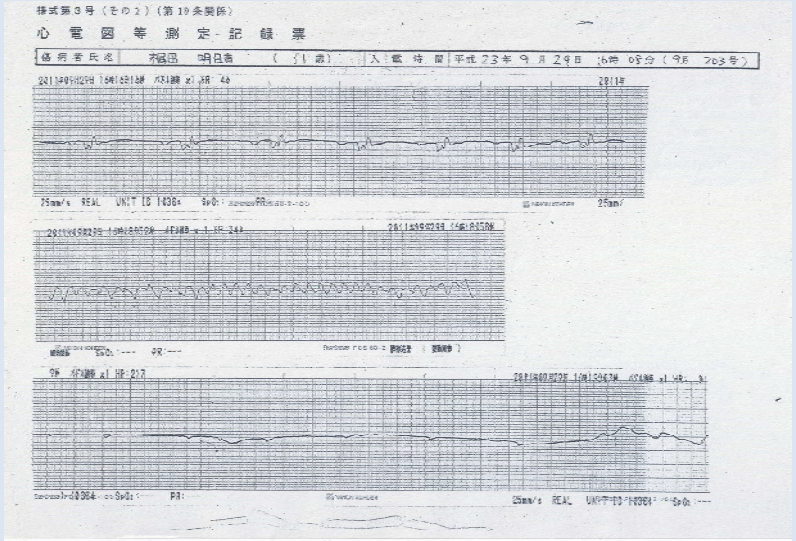
ＡＳＵＫＡモデル

分析結果をもとにし、体育活動時等に特化した本テキストを作成

・反応（意識）、呼吸の確認など心停止の判断をする際に「判断に迷ったり、わからなければ、胸骨圧迫とAEDの使用に進む」こと。

・心停止への対応は、迅速な対応が必要なため「その場で」救命処置を開始し、「その場で」携帯電話にて救急車要請を迅速に行う。

・教職員は定期的に重大事故発生対応訓練と心肺蘇生法研修の実施、そして児童生徒へ救命教育を継続することで、危機管理への意識や資質の向上につなげる。



皆様へのお願い

学校側の遺族に対する不誠実な対応

・事故の状況を、教員からのみ聴取し報告書にまとめる。
・現場にいた児童達からは、事故の状況を確認していない。
・事故当時の状況説明が、十分に出来ない。
・「ご冥福をお祈りします」以外、謝罪の言葉はない。

裁判を意識した対応は、相手に伝わります。

相手の立場に立った、真摯な対応をお願いします。

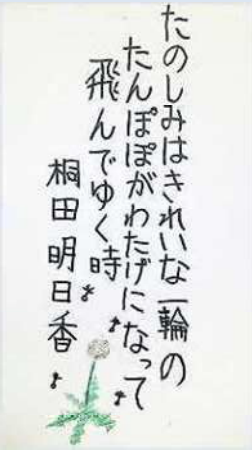
子どもたちの笑顔が、明日に続く未来への希望です。

1999年～ASUKA　明日香　　2013年～HARUKA　悠

『ASUKAモデル』、それは「みんなを守れる学校にしたい」という願い・想いの種。

皆様の心に、想いの種を送ります。その想いの種が、皆様の心で育ち、まさかの時の勇気と行動につながることを願います。

(桐田寿子)

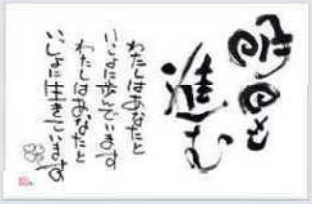


明日香
5年生の時の作品

13

2022年9月30日はASUKAモデル10才の誕生日です。
救命サポーターteam ASUKAが、始動しました。

明日香10歳の誕生日に撮影

team ASUKA 救命サポーター

9月30日、明日も進む　いのちの日。
あたり前の笑顔が、明日も続きますように。